

総裁選に挑む

保守合同後も鳩山さんは、しばらく政権の座にあつたが、政権を預かつて二年たつと、淡々として下野された。自民党の初の総裁選挙が、岸信介、石橋湛山、石井光次郎の三氏によつて争われることになり、第一回選挙は岸氏が一位になつたが、過半数に達しなかつた。そこで第二位の石橋氏との間で決選が行われ、石橋氏が勝ち、昭和三十一年十二月石橋内閣が誕生した。

この選挙で池田さんは、第一回選挙には石井さんを、決戦では石橋さんを、佐藤栄作氏は終始、実兄の岸氏をそれぞれ合意づくで支持することになり、吉田派を支えてきたこの二人は、遂に公に袂をわかつことになった。もちろん私は、池田さんに従つて第一回は石井氏に、決戦では石橋氏に投票するとともに、石橋、石井両氏に頼まれた訳ではないが、同志の獲得にも協力した。

かくて袂をわかつた池田、佐藤両氏は、その後、ある時は強く助け合い、ある時ははげ

しく争い合う仲になった。もともとこの二人は、旧制五高入試以来の親友で、相互に抱いている愛憎の念の強さは、第三者には容易に理解できるものではなかった。その二人が、いよいよ公的な立場で袂をわかつことになったことは、その後の政界地図を塗りかえる機縁になってしまった。

ところが、石橋さんは組閣直後、病を得て退陣のやむなきに至り、後継総裁には直前の総裁選挙の実績もあつて、外相として入閣していた岸氏が満場一致で推された。

石井さんは、石橋内閣に加わることと潔しとせず、野にあつたため、この政権交代劇ではチャンスを失う結果になった。岸氏の登板により、池田さんと佐藤さんの立場は、はしなくも逆転することとなり、佐藤さんは三十三年春の総選挙後の組閣で蔵相となつて、岸内閣を支える主流の座を占めることになった。池田さんは、引き続き岸内閣にとどまっていたものの、岸さんとの折り合いがよくなり、三十三年十二月、「政治理念が合わない」との理由で、三木武夫、灘尾弘吉の両相と語らつて内閣を出してしまうことになった。

しかし、約半年後の改造で、池田さんは政局不安解消のため政財界からの熱心な説得を受け、通産相として再び入閣することになった。一方私は衆議院文教委員長椅子が与え

られ、それから約一年間は、文教委員会にあって学校安全に関する立法等にたずさわった。

他方、三十四年秋頃から、岸内閣が取り組んだ日米安保条約の改正は、原条約に対しいくつかの改善が施されていたにもかかわらず、反米勢力の大きかりな抵抗に出あうことになった。また翌三十五年五月、その条約案をめぐって行われた衆議院での強行採決が、反民主的であるとして、反米勢力以外の層からも反撃を招くこととなった。かくてこの改正条約の批准をめぐって政局はにわかには緊張し、世情もまた騒然となった。そして岸内閣は、改正条約案が衆議院を通過して一カ月を経過し、参議院において自然成立したのを見届け、退陣することになった。そのころ国会は、毎日のように「反安保」のデモによって幾重にもとり巻かれていた。

政局は急転直下、後継首班の選考に移った。池田さんも当然、後継総裁に擬せられていた一人である。ちょうどそのころ、私は信濃町の私邸に池田通産相を訪ね、総裁選出馬に対する意向をただしたところ、即座に何の留保もためらいもなく、「俺は出る」といわれた。池田さんが大蔵省の次官や大臣になられるときには、必ずしも賛成しなかった私であるが、総裁選出馬は当然の道行きであると受けとめ、できるだけ力になってあげたいと考えた。

だが、私にとって総裁選のお膳立てをするのは初めてのことで、何から手をつけてよいのか見当がつかず、正直なところ途方に暮れていた。そこで前回の総裁選当時、佐藤派の参謀として岸陣営の一角を担った田中角栄君に相談をもちかけたところ、二、三日のうちに、田中君から数ページに及ぶメモが届けられた。それには総裁選挙に関する政策の大綱はもとより、具体的な運動のやり方や予算までが青インクで、重要なところはわざわざ赤インクでしたためてあった。私は田中君の親切を多とした。

早速そのメモを携えて、私は池田さんを訪ねて説明したところ、池田さんは極めて不機嫌で、ただ一言「ピター文、金を使うようなことは相ならん」といわれるのであった。私は「わかりました。どこまでご期待に沿えるかわかりませんが、できるだけご意向をくんでやってみます。ただこの選挙は、われわれ同志の責任でやらして頂きたいと思えます。できましたら貴方は、一切介入されないようにして頂きたい」と申し上げ、事実またその通り実行したのである。

池田内閣の誕生

われわれは赤坂プリンスホテルに事務所を設けて、総裁選挙の運動を始めた。まず佐藤派に協力を求め、幸いにその同調が得られることになったものの、党内工作は容易なものではなかった。候補者には、池田氏の他に石井光次郎氏と大野伴睦氏が立っていたが、石井、大野両派は次第に接近して行き、やがて大野氏が降りて、池田さんの対立候補は石井氏一本に絞られることになった。さらに河野派や、三木、松村派も「石井支持」に傾斜して行き、はしなくも選挙戦は、官僚派と党人派の争いともいうべき様相をおびてきた。問題は岸派の動向で、最後までその去就が注目されていたが、終盤になって岸派の大勢は、結局「池田支持」に回ってくれることになった。

昭和三十五年七月十三日、産経ホールで党大会が予定されていたが、池田派は出席したものの、石井派が出席せず、折角の大会は流れてしまった。私は産経ホールの一室で池田、佐藤の両氏に呼び出され、「これから直ちに三木武夫君に会い、当方に同調するよう要請し

てこい」という命令を受けた。早速、三木さんの所在を確かめたところ、丸の内ホテルの七階にいたことが判った。そこで私は直ちに丸の内ホテルに行ってみると、全館はむんむんするようなこった返しの状態であった。あえぎながら階段を上って七階にたどりついたところ、部屋の前には塚田十一郎、灘尾弘吉、稲葉修等の各氏がいて、「今この部屋では、石井、大野両氏を中心に河野、三木、松村等の各氏が集まり、重要な会議が開かれている。どうしても三木さんに会わずわけにはいかない」といって断られた。それにあたりは、最早、石井内閣ができたかのような気配で、「おめでと」といって挨拶までが、すでに交換されている有様であった。私はふと、その二、三日前にNHKで対談したとき、塚田さんが「大平君、戦いは最後の五分間だよ」といわれた言葉を思い出していた。

頼みの三木氏に会うことができなかつた私は、埃だらけの非常階段を降りて、産経ホールに引き揚げた。党大会の会場には、最早人影はなかつた。しかし、たばこの吸いながら残っているのは困ると思って、私は会場内を一巡した。点検を終えて会場を出た途端、私の前を飄々と歩いている椎名悦三郎氏を見つけた。私が軽く挨拶をすると、椎名さんは「おれには何が何だかわからなくなった。外交的に異なつた立場の人々がとうとう手を組ん

だようだ」という独りごとを、ぼっそりともらされた。事務所に引き揚げる車の中で、私はこの一言の意味するものをじっと考えていた。

事務所に帰って、同志の諸君に「面倒だが、これまで接触をもった方々に、もう一度肩たたきに行ってもらいたい。終わったら、その旨知らせてもらいたい」とお願いした。それが終了したのは、夜に入ってからのことであった。最後に私は、赤坂の料亭で食事をして、いた菅家喜六大会運営委員長を訪ねて、明十四日には、必ず党大会を開いてくれるよう依頼した。菅家氏の快諾を得てホテルに帰った私は、その夜、事務所のソファの上で毛布に包まれてまどろんだ。

十四日の午前十時から、大会は日比谷公会堂で持たれた。それに先がけて松本楼で開かれた池田派の朝食会は、活気あふれる盛況であった。選挙の結果は池田さんが勝った。池田陣営は終始筋を通して戦い抜くことができたが、対立陣営はより優勢な支持勢力を持ちながら、それを十分まとめきれなかったところにその敗因があったように思う。いわば池田陣営は、自らの力というよりは敵失で得点をかせいだようなものであった。

かくて池田内閣は成立することになったが、その成立のいきさつから新内閣は池田、佐

藤、岸の三派が軸になって発足することになった。昭和三十五年七月十八日のことであった。ちなみに池田さんは「八」の字が好きで、内閣の改造その他記念すべき行事は八の日に取り運ぶことが多かった。私は内閣官房長官として新内閣の運営に当たることになった。

首相の孤独

池田さんが自民党総裁に当選した日、私は池田さんに「貴方は広島から東京に出てこられたとき、今日あることを予期されましたか」と尋ねたところ、「全く予想しなかったよ」と答えられた。「そうすると総裁という椅子は、貴方にとっては思わざる拾い物ですから、いつ離れることになっても悔いはありませんね」と申し上げると、池田さんは「そうだと深くうなずかれるのであった。

そこで私は池田さんに、「朝に組閣して夕に倒れても悔いはないということですから、できたら長期政権ということとは、一切口にされないようお願いしたい。またこれからは、国民と苦楽を共にして頂かなければなりませんから、芸者のはべる宴席とゴルフは、できる

ことならば「遠慮願いたい」と思い切って申し上げたところ、池田さんは即座に応諾されたばかりでなく、その後も大体においてその約束は守ってくれた。

池田さんは毎朝、朝風呂で身を清めると、直ちに両手を合わせて天地神明に何事か祈っておられた。また、閣議その他重要な会議の始まる前には、必ず独りで黙禱を捧げておられた。池田さんという人は一見、傲慢な人のように見えても、実はそのように謙虚な、信心深い人であった。

池田さんはまた、読書はあまり好きではなかったが、仕事にはきわめて熱心であった。蔵相時代から国庫金の動きや株式市場の速報、さらに各紙の社説などには、毎日欠かさず目を通していた。また閣僚、とりわけ経済閣僚やそのスタッフをよく官邸に呼び、報告を受けたり、指示を与えたりされていた。時には、その度がすぎるように思われることもままあった。私が「貴方は自らこの人をと信用して、各閣僚を任命されたではありませんか。いったん任命された以上、その人に所管の仕事は任せるべきで、よほどのことがない限り、あまり細かく指示されるようなことはなさるべきではないと思います」と申し上げると、池田さんは不機嫌な表情で、「生意気なことをいうな」といわれるのであった。と

ころが、事實は皮肉にも、報告を受けたり、指示を与えたりすることの少なかった荒木万寿夫文相の文教政策が、一般に成功と受け取られたのに対し、自らが一番力こぶをいれておられた経済政策は、必ずしも好評とはいえなかったようである。禍は往々にして得意の中から生れるものによつてである。

池田内閣は、「寛容と忍耐」をモットーとする低姿勢内閣といわれていた。もともと寛容と忍耐は、政治の基本であり、民主主義のバックボーンなので当然なことであるが、「低姿勢」といわれることに対しては、私はいささか抵抗を感ずるところがあった。元來、政治の姿勢はいつも正姿勢であるべきで、勝手に高くしたり低くしたりしてよいものではないからである。

池田内閣は十年間に国民の実質所得の倍増を期待する、いわゆる「所得倍増政策」で有名になった。私はこの計画を、政府の政策の指針とすることには賛成したが、これを政府の「計画」として採択することには反対であった。ところが池田さんは、強引にこれを政府の計画にしてしまったのである。ところが案の定、実際の経済は予定より早く成長して、この計画で定めた軌道から大きく外れて、十年を待たず、四、五年の間に国民所得の倍増

は実現したのである。

池田さんは箱根が好きであった。春夏秋冬を問わず、週末にはよく仙石原の井上別荘に掛けて休養された。井上別荘は、池田さんの友人で中野で開業されていた医博井上重喜先生の所有にかかるものであった。

井上別荘の応接間には、「空山不見人 只聞人語響 返景入深林 又照青苔上」という、岩村通世司法大臣の筆になる王維の詩がかかっていた。仙石原の天気は、この詩の示すようにまことに変わりやすく、あたりのたたずまいは至極静かであった。池田さんは、いつも多くの資料を携えて箱根に上り、庭木や芝生の手入れのかたわら、資料の吟味に熱心であった。もちろん、好きな晩酌と低唱を忘れたことはなかった。私もよくお伴をして箱根の自然を楽しんだものである。

仙石原はその後ずいぶん開けてきたが、私は仙石原を訪ね、冷たい山気に触れ、長尾峠の上に富士が艶麗な上半身をのぞかせている風景を見るたびに、池田さんとともに仙石原の風物を楽しんだころのことを、つい昨日のことのように思い出すのである。

吉田さんとユーモア

池田さんは箱根の行き帰り、しばしば大磯で悠々自適されている吉田茂元首相を訪ねられた。私も、外相時代は足しげくお訪ねして、天衣無縫というか、屈託のない吉田さんのユーモアに富んだお話をうかがうのを楽しみにしていた。大磯の吉田邸には、内外の要人の往訪が多く、引退後も吉田さんは依然として、隠然たる政治的影響力をもっていた。

いつのころであったか、大磯の吉田邸の応接間が温室様に改装されて、熱帯植物がいっぱい繁っていた。私が「ずいぶん豪華ですね」と申し上げると、「うん、おれはザイバツだからね。もっとも、ザイバツのザイという字は『罪』という字だがね」といわれて、何々大笑されるのであった。私を手みやげに果物を持参して、「召し上がって頂けるようなものではありませんが」と申し上げると、「いや、ゲンナマでも別に苦しくはないよ」といわれる吉田さんでもあった。

またある時、大磯のお屋敷のお隣まで堤康次郎氏の持ち物になったと承ったので、私が

「このお屋敷も、やがて堤さんの持ち物になってしまいますよ」と申し上げると、「馬鹿をいうな。あの『五賢堂』（明治の元勲をまつた祠）だって、俺は移転費つきで堤君から召し上げたんだよ。おれは堤君に負けはしないよ」と強情を張られたこともあった。（しかし結局、大磯の吉田邸はその後堤家の所有になった）

吉田さんは、それでも何かあると東京に出てこられた。ある社会福祉団体の会合で、秩父宮妃殿下とご同席されたことであった。官房長官の私が挨拶に立ち、「吉田元総理は八十四歳のご高齢にもかかわらず、大変ご健勝で、本日もわざわざご出席頂いたことは、われわれにとって大きな喜びであり、光栄であります」と申し述べた。ところが、見る見るうちに吉田さんは不機嫌になり、控室に退かれてからも、私の方をふり向きもされない剣幕であった。そこで私が、おそろおそろその所以をお伺いすると、「池田内閣は数字にたけた内閣と聞いていたが、私の年齢を間違えるようなことでは、困ったものだ。私にとって今の一年は、全くかけがえのない一年であるのに、平気でそれを間違えるというのは許せない」といわれるのであった。事実、吉田さんはそのとき八十三歳であられた。

そこで私は、「それは全く私の不注意で、弁解の余地もありません。しかし、昭和二十八

年総選挙の時、貴方は私のところへ応援に来て下さったのは有難いが、肝心の候補者である私の名前を、何度も念を押したにもかかわらず、オオダイラ君と二度も間違えられたじゃありませんか。だから今回の私のあやまちは、あの時の貴方のそれと帳消しにして頂けませんかと申し上げたところ、「ずるい奴だ。君は」といって苦笑されてお仕舞いになった。吉田さんという人は、そんな人だった。

吉田さんは、とりわけ友誼と人情にあつい人であった。吉田さんから池田さんに宛てられた手紙は、トランクに一杯残っているが、公務にかかわるもの他は、古い友人知己や、その縁辺の人々に対する綿々たる心遣いをしたためられたものが多いようだ。

外務省には「Y項パージ」という伝説がある。それは、吉田さんに生まれた人はうだがあがらないということだろうが、私はそのことにいささか疑問をもっている。というのは、こんな思い出もあるからである。

私が外務大臣に在任中のことであつたが、ある人を次官に起用しようと思つて、池田総理の了解を求めたことがある。すると池田さんは、「この人物の起用については大磯に相談しないといけない。ちょっと待て」といわれるので、私は「それは困ります。ここでお決

め願いたい。大磯には後日、私が報告に上がります」といって、その通りにしてもらった。閣議を了えて、私は大磯に吉田さんを訪ね、三時間もお話したかと思うが、吉田さんは遂に人事の問題には、お触れにならなかつた。やがて私が腰を上げて辞去しようとする時、「どうだ、夕食をとって行かないか」とおっしゃるので、「折角ですが、今日はご遠慮いたします。ご馳走になった後で、もし外務省の人事などについてご注文でも出されると困りますから」と申し上げると、吉田さんは、はじけるように明るく大笑されるのであつた。